

第七十七回フォト句優秀作品（29年10月10日）



学び舎に往時のままの秋日差し（進一郎）



秋の日にスタンダールの赤と黒

(健夫)



秋の海

言い寄る男

引く女 (正二)



葉先まで秋のしみこむ夕べかな (浩平)

寸評:

1) 朝の陽に匠の技の新居映ゆ

長尾 進一郎

かくも精密な蜘蛛の巣を見出すだけでも一苦勞。匠の技で作った新居が朝陽に映えるとは心憎い措辞だ。

2) 学び舎に往時のままの秋日差し

長尾 進一郎

長尾ワールドの第二弾。画像と句が混然一体としてある種のムードを醸しだしている。

3) 秋の日にスタンダールの赤と黒

下山 健夫

埼玉県巾着田の曼珠沙華の群落に舞い降りた黒揚羽。1830年代のジュリアンソレルの恋の遍歴を思いだす。

4) 秋の海言い寄る男引く女

矢沢 正二

茫漠たる浜辺に向き合っている男女。これだけでも絵になり、句になる。

5) 葉先まで秋のしみこむ夕べかな

大越 浩平

秋の涼気のために葉脈が透き通って見えるきれいな写真だ。互選には漏れたが、捨てるには惜しいので句を替えて掲載した。



今回は下山さんの出題、新宿の大道芸に群がる人たちの図。

1) 雑踏に笑いのポケット秋うらら 大越 浩平

暖かい秋の日差しを浴びてそこだけが人だかりがして笑い声が

あがる。笑いのポケットとは誠にうまい表現だ。

2) 歓声に通行の邪魔と独り言 松田 昌康

時間に余裕のある人は大道芸を楽しんでいるが、先を急ぐ身にとっ

ては通行の邪魔以外のないものでもない。といっても大声で怒鳴り

つけることもできず、自分だけに呟くことしかできない。

3) 何気なく輪に入ったら抜けられず 長尾 進一郎

誰でも賛成できる感じたままの素直な句だ。

4) ひとときの笑いにこめたピエロかな 矢沢 正二

ピエロの心境を詠んだつもりだが説明不足の感あり。

5) 大道芸色なき風を朱（あか）に染め 安藤 晃二

秋の季語“色なき風”を使ったのは良いが、句意が十分に伝わらないのが残念。